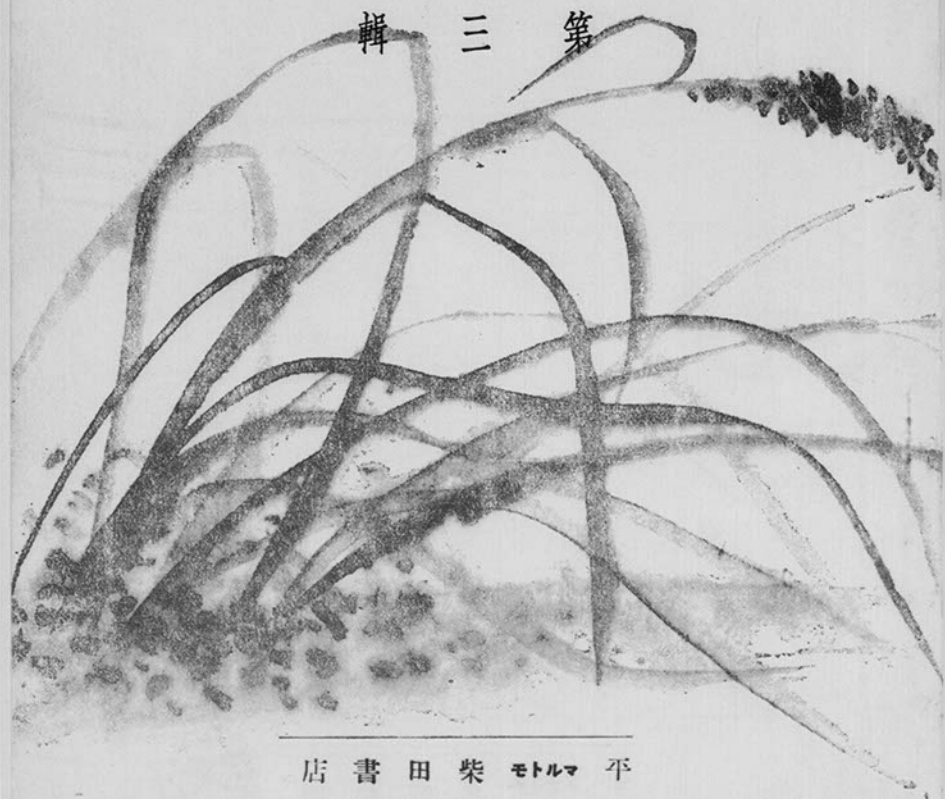
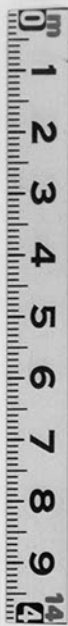


呈 麥 聖

輯 三 第



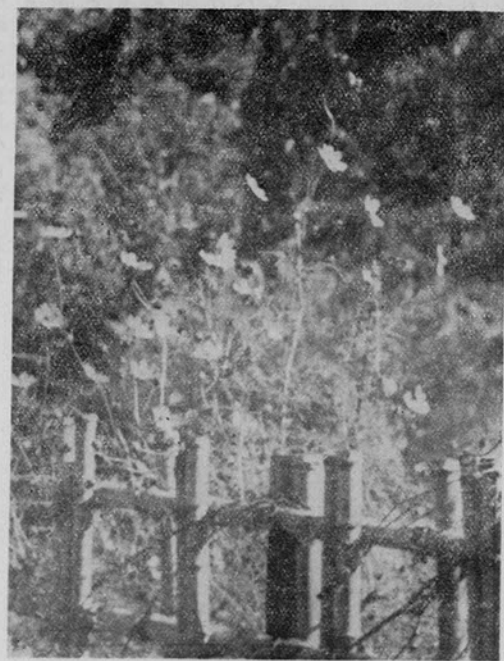
店 書 田 柴 モトルマ 平



野

麥

第
三
輯



みどり兒

高久 晩霞

吾娘に得し子をうひ孫と呼びてたぬしみづから祖父と呼びて寂しき身ごもれる娘をひたぶるに憂ひければ産みて事なき嬉しさに耐へず識る力いまだしとあるみどり兒のつぶらの双目何にかも睜はる生れし子は未だ笑はね物言はね打ちふる手足見るさへや愛なし泣く顔もくさぐさ變へていとほしとみどり兒に寄りさざめき合へりみどり兒をあやせる若き伯父叔母と過ごせる時を悔ひず吾が居る明るさのかくあるべきを父も祖父もおのが家庭に孫を見すけりたはやすく祖父わが胸に寝入る兒に母を見識りてむつかる日來むある時は萎えし乳房に偽はられ祖母のかひなに寝入るみどり兒あれ出でて二十一日晴衣着せ紅つけられぬ湯浴みしあとに人形が着るとも見ゆれ干竿にならべるが愛なしみどり兒の衣にくき孫が生む孫すらも愛なしとふこれやいとしき吾娘の生む孫みどり兒は今か目さめし奥の間にふる鈴音と母の歌聞こゆうひ孫とやがてまた來む縁日の玩具屋をわがつぶさに見ありく

慰問袋

國かくて興り亡ぶるたたかひは人住むところ永遠に絶え得ずもろこしの醜草夏をはびこるに刈れや益良雄復た生えぬまで醜草を汗あえにつつ刈る人に眞晝を照らす陽もこころせよ

赤さんぼ

草野 みどり

赤とんぼたままたまとべる河原邊を白雲のかげ疾く移りゆく人氣なく鳥かけさへも見ぬ河原水さらさら淺き音のみ山道にふと出會ひたる少女二人素直に笑みて指さしにけりゆきゆく山の小徑の青すゝき海老茶あたらし穂に立ちにけり幾年を曝れに曝れしか裸木のそれぞれに陽はまぶしかりけり

わが信念の歌

佐久間 安生

田作りつつ研めむことは生きの身の言切れしときに全てくづるる金銭を力とたのみ事々に權力を振る人になごめす權力を振る下策に金を貸し腹こやすてふ人をさげすむ三代を血族によりて結婚をせし人の子が不具に産れたる血族結婚がもたらす現象か月たちて生れし幼な子眼を開かぬ貰はぬと斷りしとき相對せし仲人の面こはばりてぬし義理立てて心偽るおろかさと思ひ仲人に斷りやりぬ幸か不幸か既に決めたるこの心野に朽つるともみじむ悔ひなき宿命のいたづらが良し身を殺すこと生れつぐも悔なき心捨鉢に斷りしとき仲人のかくせぬ不満を額によみたり悔ひ秘めて生きる一代のおろかさを思ひ見るとき窓ゆする風

遅ましい微笑

白 木 英 尾

うちふり うちふる

日の丸の旗！

群衆の中にゐて

おれも

いつか 旗をふつてゐた

深夜――

軍用列車がとほるのだ

星のあかりがさびしくてならぬ

亢奮は

どよめきとなり

はげしい軍歌となり

ばんざい！ の雄叫びとなる

深夜のプラットホーム

どの窓からも
顔 顔 顔

日炎した顔だ

その遅ましい微笑をうけとる

どの窓にも

どの窓にも

遅ましい微笑がある

見よ！

出征兵士のかげやける顔だ

あらあらしく 迷る激情だ

深夜――

ばんざい！ を叫びながら

軍用列車をおくる人々

朝の體温

せうせうと

風がながれる 朝！

桔梗は

白い花をつけてゐた

おれの感情へながれこんで

せうせうと

なつてゐる秋風！

朝の體温は

いとほしくなる

愛慾もない その日その日

真をけむらせて

思ひつかれて

また ねむたくなつた

心つゝましく

チゴイネルワイゼンを聴いて

しろじろと

朝の情熱を燃やしてゐる

しづかな會話

つめたい掌

つめたい唇

いま おまへの夢をみてゐた

おまへは

目を細くして笑つてゐた

涙ながれて

もう一度 おれは目をつむつた

――夢は 醒めてしまつた

ひとり

しんとしてゐる

あかるい病室で

しづかな 會話をくりかへす

髪など 撫でゝやりつゝ

遠く 海鳴りの音――

やがて 起ちあがり

あかりを消そうとするおまへの

しなやかな肢態！

すべては 思ひ出となる

思ひ出は

ひたひたとよせる波となり

いつまでも

いつまでも

艶

落

城

芝

鳴

磯原天妃山行

巖くぼに葉も肥えく^くと艶落の茂るあたりは眞陽とどかぬか
 巖肌のまほらに茂る艶落の葉々々に夕なづみ來し
 砂に逼ひ貧しく咲ける畫顏の萎れし花も見に清しかり
 築岸に寄り合ふ波はほの暗く潮立ちにけり夕漂ひて
 濁り江にさはに浮き立つ浮も草夕べの光りすひて動かぬ
 松の根に香に立つ百合を手折り來て萎るゝ花を家づとにせし
 身の疲れ脛にこもりて足裏は熱去りがてに夜半目さめ居り

ふつゝかの

佐藤清長

不束の身の働きの據るところ愁ひつくして残るものなし
 不束の身の働きはさみしけれ明日^{あした}持つ間も絶えて滅べり
 我れその夜ほろり死に行く心持ち眼りたりしは確かならむか
 手を足をおもうがまゝにうち伸し砂のぬくさを樂しみをれり
 よく似たる人の姿よあの人も小首かしぐる癖にありしが
 その日から偉くならむと心がけて時折々の想出となる
 さるびやも咲き出にけり桔梗も咲き出にけり見つゝさびしむ
 さらさらと樹肌に觸るゝ風の來て葉の散りたるもひそかなるかな

立

秋

野本多霞夫

もろこしの葉をすゞ風の吹きぬけてけさ立つ秋の高き晴れかな
 立つ秋の朝のころにふさはしく水引草は紅をきざせり
 庭萩の紅をきざして秋立てるあした涼しくかなかなの啼く
 糸瓜一つ宙にさがりて靜かなる秋立つらしき朝の光りや
 夏草を薙ぎる利鎌のさくさくと心のしんに涼しくしみる
 ゆさゆさと露草負うてくらがり人をいでて來ぬ煙草のけむり
 もろこしの潤葉かへしてくる風に時折胸毛くすぐられぬ
 なんとなく心ゆとりのなき日なり緋ダリヤの花をすぶと切りとる
 訪めくれば貸家となりて庭の面に鳳仙花種をはじきぬにけり
 はらはらと百日紅のこぼれ散る音なき雨に心ひかる
 筆大き出征の旗一村の空氣日にけに張りきりてゆく
 益良男を送ると幾里馳せて來ぬ汗ばこりなる青年團服
 ほつとして見送りびとのかへりゆく夜明けの路の桔梗の花(出征)
 紫蘇の實のこぼるる音やひそひそと晝の畑の秋すみにけり
 いちめんに穂をのぞかせてきふけふ豊作らしき秋日和なり
 訴へてもやうどころなき心なり萩の小花をづらりしごきぬ
 考へて考へごとを諦らめて秋の夜風に吹かれ出にける
 酔ひざめの咽喉の渴きに切々と一つこぼろぎのかすれ啼く聲
 ひともの野菊咲かせて縁先に炭切り^{すすき}鋸の目立てして居り

長岡宗好博士と

その書簡

白木英尾

明治卅三年、有名な足尾の銅毒問題が勃發し、關係附近住民の蜂起するや、渡良瀬川沿岸は一大騒擾の巷と化した事件は、今も尙史上に思出される大事件であつたが、この時銅毒被害の實地踏査に赴いたのが、當時東京帝大の古在直由、長岡宗好の兩博士であつた。古在博士は曩に東大の名總長と謳はれて既に故人となつたが、長岡宗好博士についてはあまり知る人が尠ないやうである。

長岡宗好博士——福島縣石城郡好間村今新田の人。横濱英和學校を経て明治十六年駒場農學校を卒業、明治卅六年一月獨乙ミユ

ンヘン大學に學び卅九年八月歸朝、翌年十二月東京本郷の自邸にて逝く。行年四十二。

この獨乙への留學に先だつて提出中の我が國農藝に關する論文によつて、明治三十七年農學博士の學位をうけたのであるが、博士はわが郷土が産める學界人として先づ第一指に屈すべき人であらう。今の貴族院議員仁井田益太郎博士もその腕白時代を空櫻園塾に過してゐるので、長岡博士今在りなば、この仁井田博士と共に學界の双壁として吾々郷土人の鼻も高かつたであらうと思ふ。

博士は、石城自由黨の先覺者で戸長の要職にあつた長岡宗雄の長男に生れた。幼時より寡言の性でいろいろの逸行も多いが、これはその一つである。

まだ六七歳の或る日のこと、ひとりで遊びに出たまゝ夕方になつても家に歸らないのでゐるので、近所の心あたりを捜したが何處にも居ない。どうしたんだらうと家中の騒ぎにな

つたが、どうして仲々見つからないわけである。博士は、家の前の里芋畑で、大きな芋の葉の陰に遊んでゐた。初めは畑の土いぢりをしてゐるうち、里芋がころりころりと堀り出てくるので面白半分に畑中の里芋をつぎつぎと堀りおこしてしまつたといふ。

これなどは、後年の「農學博士」の風貌がなんとなく潜在してゐるやうで面白い逸話であると思ふ。

博士がミュンヘン大學に留學中、私の祖父に宛てゝ寄こした手紙のうち、今日、非常に興味深く且つ感慨にたへない一節がある。

日本東北地方不作の報再三當地新聞上に表れ中候が實に同情の念に堪えざる次第に御座候。亦今朝の當地新聞及佛國新聞に東京電報にて平町大火焼失六百戸死者三十七との報に接し驚き入り申し候。多分鈴木家も損害を受けし事と存じ候。御攝理の銀行等は如何に御座候や。世界無名の小町平の失

火報が二日目に大歐の新聞紙上に發表せらるゝ様に相成候も全く百戰百勝の餘榮と存じ此の儀は御同様祝賀の至りに御座候。

この手紙は、二月二十五日(明治三十八年)の日附であるが、文中の「鈴木家」とあるのは、今の市會議員鈴木彌太郎氏が博士とは叔甥の間柄であり、又、「御攝理の銀行」とあるのは、即ち當時の平銀行を指してゐるものである。尙、この封筒のスタンプを見るとミユンヘンIBP局が二月二十七日で磐城上平局が四月六日のスタンプになつてゐるので、その間四十日の日子を経てゐるのも今から見ると今昔の感がする。

明治三十七八年の日露戰役前後四年間、獨乙にあつて祖國の興亡を心憂しつゝ學術の研鑽に専念した博士も、眞に學者なればこそ然もあるべきであらうが、その半面「平町大火」の報に愕然とした博士を思ふと、言へ知れぬ親しみが湧いてくるのである。當時を知

る人達にとつては、この手紙の一語々々が新たな記憶を呼び起こすことであらうと思ふ。殊に「世界無名の小町平の失火報が二日目に大歐の新聞紙上に發表せらるゝ」の一言は、當時の人々でさへも、この手紙によつて初めてそれと知る人が多いであらうと思ふ。實に感慨無量のものがある。而も「小町平」が「平市」となつた今日、この一事は、一つの語り草としていつまでも市井に残しておきたいやうに思ふ。大火のエピソードとして残しておきたいやうに思ふのである。

現に我が邦學壇の誇りとされてゐる駒場の農科大学農藝科の教場は、博士が生前寢食を忘れ蘊蓄を傾けての設計に基いたものであつて、同大學の講堂には博士の大きな肖像が掲げられてゐる。それから又、栃木縣古河町郊外の渡良瀬川畔には往年の鑛毒事件を物語る記念碑が建つてゐるが、その碑文中には、古在博士と共に、わが長岡宗好博士の名が不朽

に刻まれて消えない。實に鑛毒事件踏査中の博士一行が、殺氣立てる民衆に前後を包圍されつゝ幾多の迫害と闘つて無事にその任務を遂行したる尊い記録は、學界に於ては勿論、政界財界に於ても當然注視の焦點となり、同事件に對して重大なるピリオドを示したのであつた。これら長岡博士の事蹟などについては、他日再筆する折があらうと思ふ。

故土屋知美氏の

追憶斷片

柏木 哲

恐らく何人も知るまい事實として、つい先頃の警城新聞にも書いたが、大正七年の春出た地方文藝誌『オアシス』の題號が、その同人から話を持ち込まれた土屋寛氏に頼まれて

自分が書いた創刊祝辭中の

素寒單調な人生に斯うした雑誌の生れることは、荒涼たる砂漠に鳴ぐキヤラバンの一隊が木陰に滾々たるオアシスを發見した様な歡びである

から出たものであつて、當時文藝愛好の若い人達が、そうした話を持ち込むに差當り土屋氏以外に餘り無かつたのだから、地方では何と云つても其の道の大先輩と云はずばなるまい其の頃炭鑛や鐵道方面に二十人程の刑事被告を出した所謂『東管疑獄事件』——東管は東京鐵道局管内の略稱。古疵を疹かせる嫌ひあるので詳しい註釋を避ける——に就て自分が後にも先にもたつた一回編輯を頼まれた當時の月刊警城時報に書いた事が、新聞紙法第二十一條の所謂

犯罪人又は刑事被告人を賞恤にビタリと抵觸して、今尙ほ某地に健在たる工檢事時代、罰金四十圓に處せられて署名人たる土屋氏に迷惑を掛けたりしたが、其後時

報が地方最初の日刊新聞となり、次いで大正十年四月の創刊以前から自分が警城新聞に關係する様になつてからは、お五一寸商賣上の競争相手と云つた立場に置かれた譯である。随つて自分は遙かに斯の道での後輩であり乍ら爾來餘り接近せず、その年の十月同氏が、かみなり ころ／＼

なんて辭世の詩を遺して亡くなつた時も、單に遺憾を解剖に附した話などを聴いた程度に過ぎなかつた。

○ 恁麼事情で自分は今日顧みて氏の全貌を語る程その人となりを知つて居らぬが、自分からはじめて新聞界に入つた大正七年の春から夏の終りへ掛ける半歳と、二度の樺太放浪から歸つた翌春警新の發行以來その年の秋土屋氏の亡くなつた迄の印象を語るならば——土屋氏は新聞記者としては必ずしも文學家では無かつたらしいが尋常人に較べて其の著眼が常に奇警卓拔であつた。例へば少くとも書かれ

た當人は有頂天になつて喜ぶ地方有志の人物
月旦を書いたり、或は種々なる方面を耕めた
「番附」を作つたり、パンフレット様のもの
を出した事などもあつて、當時としては極めて
尖端的の試みとし迎へられたものであつた
日刊に直す以前の話であるが時報發行の傍ら
儲かるとなると賣炭屋もやれば浪花節興行も
遣ると云つた鹽梅で、之は餘談ではあるが自
身また浪花節のマクラ位を喰ふ趣味があつて
咽喉は素人としては寧ろ出来過ぎて居つた。

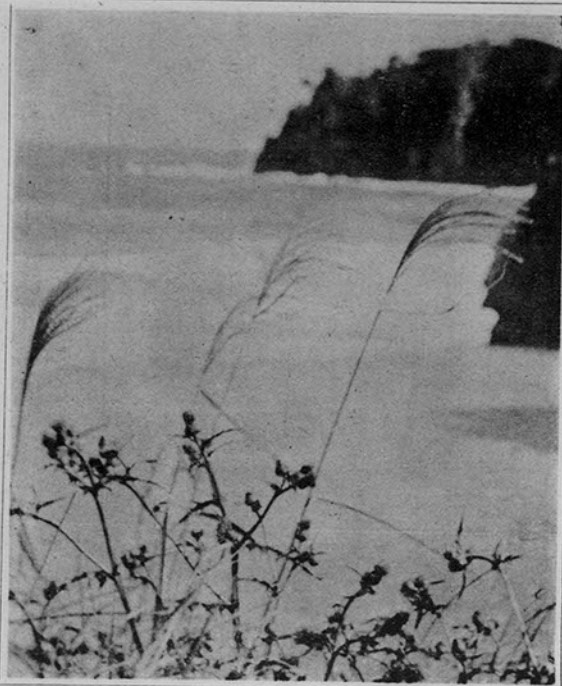
○ 自分が曾て短い物の代表として秋の日とテ
リヤの尻つばに土屋氏のステツキを加へた程
文字通り矮小短軀（自嘲的にペンネームを知
美と云つた）の土屋氏はセルかなんかを癖な
がに、フェルトの草履を穿いて、人を茶にした
様な其角頭巾を冠り、指輪と金歯を光らせて
は巧みな座談に人を大笑させたものである。
何かにつけて敏捷筆の如く、吐の點は姑ら
く云はぬとするも何となく野依秀一氏を聯想

させられる様な人柄で、相當に我が強く今は
亡き市内南町S醫師の一身に關する問題で筆
禍をかひ大いに揉み抜いた事は今尙ほ記憶に
存する人も少くはあるまい。

獨斷的の云ひ分か知れぬが、烏口にたつぷ
りと墨汁を含ませて、つツと太い線を引いた
様に人間の輪廓がはつきりした人物であつた

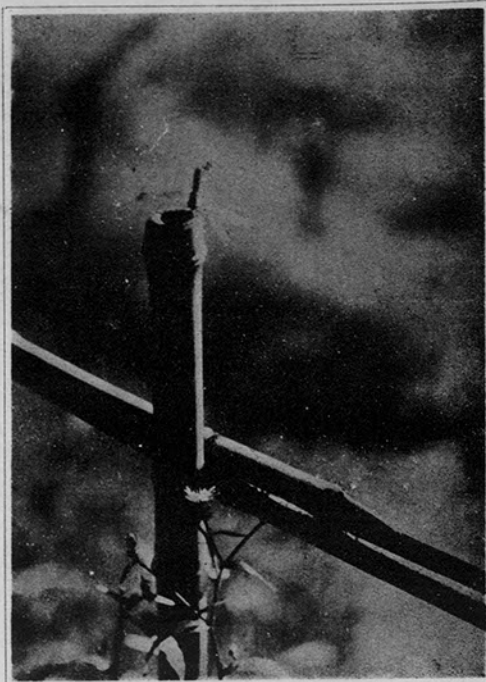
○ 大正十一年かの夏に性源寺の庭で撮つた物
故新聞記者小川（國民）土屋兩氏追悼會の記念
寫眞には兩氏の遺族を中心に當時の

東京朝日八代公行 いはらき宮田三郎 報
知高橋要次 東京日々安部多氣雄 磐城時
報佐藤作平 いはらき川崎文治 福島民友
逢田光匡 福新吉田壽三郎 國民半谷政喜
時報鈴木昌雄 性源寺住職渡邊則成外僧侶
が寫つて居るが、いま之を出して見ると以上
のうち八代、高橋、逢田の三記者と渡邊住職
とが亡くなつて居る。
茫々夢の如し。最近土屋氏の建碑計畫ある
事をきき、青苔白露の下に眠る故人を憶ひ出し
て此の一文を草したのである。



すゝき

小野 昌 幸



□
□
□

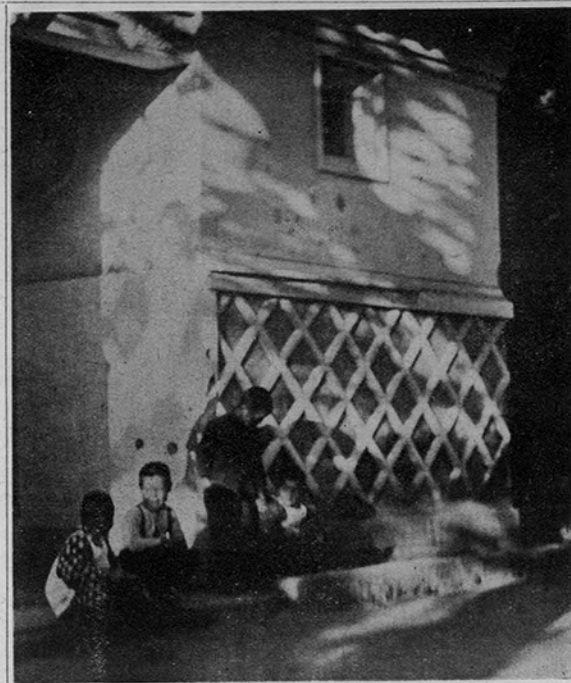
とんぼ

里見 榮一

□
□
□

秋
日
和

大
村
一
郎





□ □ □

柿

□ □ □

三 浦 芳 勝

あ る 想 念

野 本 多 霞 夫

紅 萩

草原のつきたところは、ちよつとした小高い丘になつてゐて、紅萩が崖のこみちをふちとつてゐた。私は崖のこみちを、先にたつて下りて行つた。女はちつと私を見つめた。

『大丈夫、下りておいで』

『だつて……何だかこはい』

女は足袋をぬいて、裾をからげて紅萩の間を下りて來た。いくたびかすべりそうになつては、白い柔かな手を私の方へのぼした。

静かな秋の午後の空を、はてもなく山寺の鐘がひびいて行つた。

か や つ り 草

右も左も、櫟林につまれた小高い丘になつてゐて、

丘と丘との間をやはらかな秋草が、淡い夢見心地にひろがつてゐた。そこにはそよ風の音もなかつた。家の影もなく、人の姿もなかつた。

『どう、やすまない』

女はどつしり腰を下して足をのぼした。黒いゆたかな女の髪、女のふくよかな胸、かほそい、しかし肉つきのいゝ女の素足。

罪多き心を吾れと思ひをりかやつり草の莖をさきつゝ、女は萬年筆で書いて、ハンカチを私に渡した。女は美しい眞白な齒をみせて笑つてゐた。

女 郎 花

『すいぶん歩いたね』

『えい、歩いたわね』

『疲れやしない？』

『そんなでもないわ』



『しづかだなあ、この邊は……』
日も西に傾むいた初秋の午後、ふとすれちがいに見上げる女の横顔……

『こんなところ嫌ひだらう、寂しくつて』
『好きよ、わたしね。街でなんかあふのは、何だか人の目がうるさくつて、気がとげとげしちやふわ』
然しいつしか私たちは森を出てゐた。女はいつとつたのか、女郎花を一本もつてゐた。

すゝき

湯からあがつてきた時は、女はすっかり髪をなでてきちんと着かへてゐた。そして二階の欄干によりかゝつて庭をみ下してゐた。女の白い襟足をにほやかに月の光り

がさしてゐた。

『あそこにすゝきがあるわ』
黒い瞳がかじやいた。餘りにも人工的なこの大きな庭隅に、やつと穂をのぞかせたばかりのすゝきは、嬉しいものであつた。

女は私の膝に半身を投げかけてゐた。

もし月が永遠に照るものであるなら……。

一夜のあさましい煩惱の姿が、なやましい程によみがへつてくるのであつた。

二本は穂をのぞかせて庭すゝき月の戀しき夜頃となりぬ。

私はノートの隅にそつと書いておいた。

秋立つ頃

瀧 三地子

秋の風が、隙間だらけの襖を叩く。
秋の足音が、去つて行く都の人達に迫る。

掃き捨てられた様な白い雲。かへつて来る何物をも待たうともしない。フイゴの中で右横左横する暇のないつく

られた風。

迫力を失つた秋。然し私達は若い。

透徹した空気の中に眞すぐなライフ、ウェイをつくつて行かねばならない。

暑さの中にも負けずに働きつゞけて来た意氣をみがきたいと思ふ。

蒼い空が私達の神経を慰める。けれど一方、自分の運命を切り開き得なかつた人の嘆きが秋の日の下に思はれるのだ。恐らくは——自分であるかも知れないし——友であるかも知れない。唯そこに諦悟の境を見出し得る人でありたいと願ふ。

それは過去として葬ふべきことかも知れないが、誰をも信ずることの出来なくなつた者にとつては、自己を慰める手段かも知れないと思はれる。

ザクロを眺めながら逝つた人もあるてふ。

櫻貝を抱いて海の藻屑となつた名もない詩人の心。一切の執着からはなれ得ない人の心。然し私は思ふ。『一切に生きよ』と。

女々しい感情から逃れて一本立の喜を味はふぢやないかと。

空氣の様に袋に入つた正體を學んで、何處へでも逃れて行けそうな氣がするのだ。

人は惡の中へでも、一厘の自己的色彩の價を認めれば入つて行けるらしい。

セコンド、ラブを嫌つて生き抜いた女への讚美は私達の若い心を責めて止まない。

秋の日の元に落着いた想念を捌へたいと思ふこのごろ一切への精進を秋の日に思ふ。

空は蒼くなつて行く。つき破つたら——夏の日の友情を惜しみ乍ら去つて行く人の心情があるかも知れない。

民謡

臉

小濱牧泉

言つたなあんまり弱いぢやないんか

言はぬが男の意地ぢやないんか

寂しい時にや笑つてゐらあと

言つた臉をなぜふせた。

言つて苦しみや同じぢやないんか

言はぬが男の花ぢやないんか

どうせひとりと屏かんで

そつと溜息なせ洩らす。

月日

殘炎モ一レツなり。第三輯の編輯を始めることになり、夜七時から編輯部に来る、前輯の出来榮えを語りあひ、ビールをのんで別れる

月日

第三輯の特輯記事として「秋」を主題とした小品、隨筆、紀行文、日記文等を募集することになる。早速、同人社友へ原稿の依頼状を出す。夜十時までかゝる。

月日

同人瀧三子さんからいち早く原稿届く。

月日

日支事件による動員召集の壮なる光景が、一日一日と高潮してくる。編輯會議もそつちのけて、戦争の話持ちきりである。

月日

千人針が街頭に氾濫してきた。女も子供も一緒にたつて戦ふ。この熱誠、これが日本の姿なのだ。遙かに戦地の人たちへ、あつく思をかよはす。戦争は軍人だけではない。國民すべての戦ひだ。戦地へ征かぬ者は、戦争をし

合歡の花

高 端

巍

あさなかな葉先に露をとりめぬる稻のはばりの見の頼もしき
愛しき兒らは今日の暑さを海に出でて喜びあらん眼にもたちくる
河原道を暑さにあえぎ咲きつゞく菫顔の花の薄紅ほのに
豊年を咲くとふ合歡のほの紅くこぼるる雨に匂ひぬにけり

波

伊 藤

弘 道

陸さしてしひに押しける大波に足さらはれて覆へりたる
さざれ波引きかへす間もあらはこそうちかぶせ来る潮のうねり
ひたぶるに逢ふ日を待ちし鋭心の今はむなしく萩の花散る

噂

草 野

葉 子

み佛に花手向けむと雨はれのつゆけき庭におり立ちにけり
夜もすがら語らひしこともありしかど君は苦むす慕の下かな
さまざまの己が噂を耳にしぬ涙ぐみつゝ鏡ぬぐふも

病 床

野 原

百 合 雄

空碧く目にしむ日なりひとりひて心ひとつをもてあましおり
折々を窓のガラスに音立てて時雨うち來ぬ淋しきところ

てあるつもりで、働かねばならぬ。

月日

時局騒然としてゐるせいか、原稿の集りが非常に悪い。締切を九月三日迄延ばして、同人社友へ催促状を出す。なか／＼汗が流れる。

月日

同人佐藤清長、草野みどり、城芝鳴、佐久間安生の諸氏から原稿ぞく／＼と来る。この調子、気持ちよくなつて夜ビールを飲む。

月日

關東大震災の記念日だ。會議後、例によつてビールを飲まふとして危ふく中止。酒なしでいだった。バックカステ賣上げ少なき由

月日

一先づ原稿を締切る。集り方は悪いが、新人の多くなつたことに目がつく。出てこい／＼池の鯉である。鰻もどぜうもみんな来いだ。

月日

原稿整理はじまる。葉書だのノートの紙片だのへ平氣で書いてよこされるのは困る。こんなのは以後應募の資格なし。原稿はやつぱり原稿用紙へ書いて貰ひたい。

月日

日方百グラムもあるやうな原稿の束が突然崩

おのづから涙ながれてをりにけり晝を啼き澄むこぼろぎの聲

み ち 潮

志 賀

權 子

夕暮るる大河に潮のみち來るらし水音しづかにきこえ渡れり
潮はいまゆたかにみちぬ大橋の橋杭の邊はうづをなしつゝ
船大工釘うつ音は高堂の茂みの中にひねもす聞こゆ

生活のかげら

青 柳

由 美 子

こはれた手鏡の片々はわたしの生活のかげら――、わびしいかけら
けふもまた風船玉のやうなさびしさ、矢車草のひよろ長さかな
こんな寂かな夜更け、虫の鳴く聲はあいあいとして――
さまよふてきた海のない港、母よ！ 潮鳴りの音は私を泣かせる

帯 の 柄

青 葉

露 子

秋晴れの街ゆく女の帯の柄われのこのみにしつくりと合ふ。
おのづから心はづみて語りぬる吾れと氣つきぬこぼろぎの聲
帯上げのしまり心地をそのまゝにぶらりいで來し秋風の街

事 變

大 平

新 三

齒痛みをこらへていゆく秋風の街にひびかせて號外のとぶ

けられて、未知の人の心臓に驚かされる。但し採るべき作品なく、遂に没。

月 日
なんとしても原稿が足りない。多数の同人社友たちは一體何をしてゐるのであらうか。あまりの臆甲斐なさには、さすがの編輯子も開いた口がふさがらない。グウとかスウとか音を出して欲しいものだ。雑誌発行見合せの議起る。

月 日
小濱牧泉氏より原稿届く。非常に有がたい。

月 日
柏木哲氏よりの分、光ちゃんが持つてくる。これで、どうやらホッとした氣持になる。

月 日
高久曉露氏より詠草十八首を頂く。いよ／＼最後の編輯にとりかゝる

平寫友會の大村一郎氏より、お頼みしておいた寫眞數葉届く。いづれも寫友會員の力作である。大村氏の御盡力に衷心から御禮を申し上げます。小野氏のコスモスは扉に使ふことにしたが、里見氏の「とんぼ」の製版危ぶまれる月 日
編輯全くだる。大いにビールを飲む

電柱の北支ニユースに吸はれゐる一人ひとりの新たな昂奮
一途なる心たのもしをみなたち千人針に街頭に立つ

萬歳の怒濤の中をしづしづと軍用列車はいで立ちにけり
應召のつはものどもを送らんと深夜の驛に集ふをとめ子

出征の子に贈る

吉岡獨歩

劍太刀佩きてそ起てゐますらは名をこそ惜しめ身をな惜しみを
老らくの身は軍馬にも及はさり戦の場を蹴まんすへなし（遂懷）

會津の旅

田村月魂

百合、桔梗、撫子淨くみだれ咲く山路をわけてわが汽車は行く
勇ましき萬歳の聲に送られて戦ひの庭に出で行くつはもの
濁りたる浮世の風を知らぬがにすみわたりたるみづうみの面
ふる郷を遠くいで湯に籠り居の身にしみわたる蟬時雨かな（小谷温泉）
大川に立つ若う人は日ねもすをたつきのしろに岩魚探るとふ
樹がぐれに佳き人離り行く見ればひぐらしの聲も寂しさにあり
雨にけぐる城を臨みて有りし日の飯盛山上の若人おもふ（飯盛山）
もののふが身を君國にたてまつる尊き犠牲に二つはあらず
いたづらに言はで行ひし白虎隊の尊き精神とはにかんばし
高原の朝は閑けし冷え冷えと風わたるなり秋立つらしも（沼尻温泉）

秋のポエジイ

瀧 三 地 子

秋は――
すき透つたバラフィン紙から覗いた
小心者の戀。

赤い給具を失つた立秋の海に
學者風な人間が 部厚な洋書に
季節のページをくる。

夏の日を残骸を抱いて
秋風は 奈落へのガイドを急ぐのだ。

愛情のタクトは、
清澄な空に――
バラツク式の戀譜は奏でられる。

秋――若い人の希望の五線紙に
未完成の思惟が躍る――喜。

秋――悲哀。
松葉杖で描かれた人生觀に
灰色のフィナーレを強調する。
そして……

湯氣の中に浮き立つたドリームを
亦あらぬ日への思は冷す。

秋 哲理への煽動
ほころびた心を繕ひながら
人は眞實への小路を歩む。

山房口占

渡邊何鳴

庭山に龍膽蒼く咲ける見ゆ
龍膽のむらさきふかく露澄めり
龍膽のむらさき嶺ろを想はしむ
龍膽に嶺の霧降れるいくそたび
龍膽のむらさきうばふ霧ながれ
×
つはものは征けり山田の稻匂ふ
つはものは征けり野もせに萩咲ける
つはものは征けりさ庭に雞頭燃ゆ
つはものは征けり秋蠶のさかななる
つはものは征けり幾山河の秋

野馬追

半谷絹村

出陣や霧雨霏々と花葵
出陣や夏霧に冷酒くみかわし
出陣や夏霧に神酒いたゞきて
短夜の灯に物の具の金の色
家ぬちに物の具ちらしあけやすき
野馬掛の城跡にたてし旌旗かな
野馬武者の慰勞の宴や青嵐

海波渺茫

大和田水明

風はらむヨットに月の涼しさう
甲板に枝豆かこむ一座かな
流星や防空の鐘けたゝまし
探照燈消えたる死都や流れ星
流星や黍の葉すれに闇深し

一同人として

小濱牧泉

私は既に文學行動から後退した人間である
それでゐる私は郷土に文藝雑誌の生れる事を
待望し、幾度かその機運を迎ひながら出現し
なかつた事を心から悲しい事と思つてゐたの
である。野麥の出現は私を欣喜せしめたが、
作品行動に自信と熱意を失つた私に取つて、
みんなと一緒に行く事が出来るかどうか
か非常な危惧を感じたのであつた。だが私は
やがて仲間に入らないではゐられなかつた
第二輯巻末記に文藝雑誌から一步脱した文化
雑誌でありたいと書いてゐる。私はこれで救
はれた。私はもう彫心鑠骨の作品行動は出来
なくなつた。然し私は未だに文藝を愛してゐ
る。又、文化への関心も些少なから持つてゐ
る。だから、何等の文學活動を持たなくとも
野麥を守り育て野麥を地方文化に何等かの寄
與をもたらす方向へ進ませて行くだけの熱意
を持つ同人として野麥のグループに加盟した
嘗て文藝雑誌發刊の話が出た度に、欣然賞
意を表示したのは大抵の場合舊詩南社の人
々とその他の若い人々であつた。私は是を石

城人の偏狭故と思つてゐた。だが今思へば現
在の私のやうな人も多くあるのではあるまい
か。過去に聲名高かりし多くの詩人を私は知
つてゐる。然し是等の人は既に石城文藝界
に大きな足跡を残して勇退した人であるとか
へて悪いだらうか。だから文藝雑誌發刊に期
待と理解を持ちながらも作品行動を捨てたが
故に進んで参加されなかつたのではないかと
考へられる。然しながら文藝への愛惜と郷土
文化への関心は烈々として燃えてゐると思ふ
従つて野麥に對してもその方向なり作品なり
に親切な示唆や指導を示してくれるに違ひな
い。野麥はこれらの人々の確かな批判と理解
の上に立つて進んで行かなければならない。
片寄歌二は第一輯に郷土文化についてなる
一文を以て野麥の進路及び使命の一部を示唆
してゐる。郷土文化は十分なる郷土認識の上
に開かれねばならない。従つて野麥が熱意を
以て直接的には郷土の研究調査に努め間
接的にはそれらに資する雰囲気醸成する事
に努めて行かなければならない。然しながら
野麥は何と言つても文藝を主とする郷土雑誌
である故に、野麥の、郷土文化の向上に對す
る企圖は文學的領域に於て文藝的實踐に於て
のみなされるであらう。新興都市の平及び、
石城の文化レベルを野麥の中に觀望と感じ

自嘲

鈴木欣々子

月に出ぬいさかひの血をしづむべく
月に出ぬかたくなの父忘るべく
月を蔽ふ雲あらねども路くらき
月にぬれ五尺のおのが身を嘲ふ

×

萩咲いて白衣のひとの瞳ぞ澄める
虫澄めり白衣のひとを戀ふるとき

初秋

金澤千保

無花果の鈴生り空に秋立ちぬ
堪ふべくもあらで残暑の惹人
踊の輪はなれ來し人月に立つ
小田刈るや狭霧にふるゝしづ心

無題

石橋榮子

眠れぬまゝに屋上に出て見た。晝の騒擾を
静寂の闇に包んでしまつた街は峻厳と冷徹を
以つて迫り、空に澄んだ星は妖しい骸骨をさ
へ覚えさせた。

ふと思案は數年前夏の或る一日、赤城山中

嶋々に霧のながれや稻架の村

習作

武石光聖

虫時雨露もしぐるる夜なりけり
洪水の警備解く夜や天の川
秋の山友手を舉げて別れけり
秋出水高張かかげ村役場
渡り鳥乳張りて機を下りけり
夏川の夕づく匂ひほのかにて
湯上りの素顔もよろし門納涼
踊らるゝ若さ存分踊りけり
白玉やコップのふちの紅のあと

金魚玉

今野梅檀子

夕庭のひかりあつめぬ金魚玉

られるのは何時の日であらう。

野麥に據る人々は多種多様でありその主張も行動も別々ではあるが、郷土文化を引き上げやうとする意味に於てはがっちり肩をくんでゐる。これ等の一見錯雜したやうに見えて、こゝ然たる融和をもつ野麥の進路をこよなく楽しいものと私は考へる。

野麥の作品は郷土文壇の相當高位のレヴェルを示してゐる。これは益々光輝あらしめて行きたい。相當に新人の數も表れてゐる筈だから、出来るだけこれらの新人を抱擁して燎爛たる詩歌の花を眺めたい。平を中心とする文化現象の中から色々なものを選び出して色々考へて行きたい、郷土の文物の調査もしたい。かう考へて行くだけでも私は期待にわく／＼するのである。

で接した光景に逢着した。場所は大胡口より

二里ばかり登つた瀧澤不動である。其處で數人の行者の修業を親しく見たのである。あるものは印呪を切つて、十餘丈の瀑布の瀧壺に飛び込み、全身茹蟬の様になる迄打たれ、あるものは手といはず顔といはず無數の蛇を付けて、裂帛の木精を樹間に響かせて居合技の型を行ひ、又あるものは岩上に端座し、冥目することしばし満身の力を拳に集中し、氣合一聲、小兒の頭大の石を碎く等實に猛烈なものであつた。當時子供心に其の修業の意味が何うしても解せなかつた。其の後日蓮、親鸞良寛、一休等の傳記を読み、肉體の力を消耗させるかゝる修業が、煩惱解脱の手段である事を教へられた。

芭蕉も煩惱中の女に付いては、深刻な惱を經驗した一人である。併し彼は前記の人等と異り、其の修業を俳句の上に實踐し寂・栗の獨目の境地に到達したと云へよう。實利主義者は俳句を以つて餘裕文學と云ふ。併し現在の若い作家の中に「樂しみ」に作句して居る人があるだらうか。果して何人餘裕に恵まれたものがあるだらうか。吾々俳人は災ひされたる周圍に抗じて、兎もすれば傲慢になりがちな精神を、自己の内部に集注すべき手段として、俳句を選んで居るのである。故に消極的

語らひのひまをながめの金魚玉
蟬生るる朝しづかなる風ありぬ
葉洩れ日のゆらげる谷の苔の花
葛の花こぼれてはやき瀬となりぬ

或る夜の句帳

石橋 柴子

短夜の更けて衢の聲も絶え
蚊帳暑く真夜の静寂を獨り守る
汗ばみし掌にまろべるはこの睡眠劑
涼風生れにがきタバコの煙吹かる
蚊帳涼し星の表情澄みゆけり
まがなしみ青き腕に蚊帳は冷え
窓白み鉢の白百合光となる
ころろ奏え百合の香りに來るねむり
百合の花ここだめぐり來重き臉
白百合の幻影吾れをうしなはず

書 信 一 束

○野麥第二輯お送り下されまことに有難く拜見いたしました。平に御誌の發刊されましたことは早く小山田氏よりきいてをり一度拜見したいと考へてゐましたに非常に嬉しく存じました。地方誌として稀にみる立派な同人諸氏の熱意の程がうかがはれ敬意を表します。福陽歌壇としても一つの大きな誇りであらうと信じます。及ばず乍ら今後は親しい御交誼をお願いいたします。御禮迄。

(矢吹正衛)

○御手紙を受け乍ら送致稿も出来ませんで誠に申譯ありません。盆あがり下の方が全部交臂があつたり加へて應召兵があり又なれないものが加つたり可成り繁忙を極め御期待に背いたことは御手達さへあしからず御許し願います。尙次號には力めて責を果したいと思つて居ります。右同人諸兄によりしく。

(松村 清)

○三號原稿、全くの行きつまりから來る難産で失禮しました。この點編輯心理を解せざる非紳士的な恥を感じてゐます。何とぞ悪しからず。佐川氏は栃木の古峰山へ大漁祈願とされてゐます。

(高木 生)

○野麥毎々御惠贈多謝致します。二號では松村清氏の柿沼一好氏の憶ひ出など興味深くよみました。評論のないのはやゝ淋しい氣がしますが如何。

(島田 春雄)

廣告主各位へ

爽秋意上澄みわたる頃となりました。

小誌も、各位の理解深き御支援によつて、茲に第三輯をお送りすることにいたしました。これは一重に各位のお蔭を蒙るところと存じ厚く御禮申し上げます。寔に小誌にとつては全く過分の御助力を頂いておりましたので、恐縮にさへ存じておりましたが、今や、時局重大にして密附並に、獻金も多く、この際小誌の御迷惑を及ぼしてゐるべき場合でないかと存じ、今輯の御廣告はすべて乍勝手御意慮申上げることと致しました。何卒、編輯部同人の微意を御斟酌下されたくお願い申し上げます。

尚、お蔭様で第四輯の發行基金までは、どうやら間に合ひますので、其の後において、再び御同情お願い致したく存じてをります。その際は又、何分共よろしく御願ひ申上げたたく、只今より御懇願申し上げます。

な俳句觀念と、退嬰的な作家態度に囚はれてはならぬ。吾々の心の動きを突きつめて行けば、俳人として以前に人間としての、社會人としての精神の動搖である。俳人であるよりも、先づ社會生活者である以上、吾々の心の動搖と精神の露とを、作品の上で如何に實踐して行くか、全體的の苦惱であらねばならぬ。

藝術は飽く迄情熱である云々。吾々の進歩的にして、追従を嫌ふ活動は往々にして、自己の情熱の赴くまゝに満ちあふるゝ主觀を、短詩型の中に盛らうとして失敗する、此處に始めて良き指導と相俟つて、自己反省と相互檢討の必要が生じて來るのである。石城俳壇の現況は如何であらう。吾々は句作に精進すると共に、抱擁力の大きな俳人たるべく努力する必要はないだらうか。

星が一つ流れて夜氣が冷い、と身體を包んで居るのに氣が付いた。自動車が一豪ヘツドライブの光芒を街角にいかけて曲つて行つた。何かしら晴々しい心の平衡を取戻す事が出来た。

(二一、九、五)

野麥社秋の短歌會

日時 來る十月十日(日曜)午前十時
會場 平市 マルトモホール
會費 金三十錢(當日持参のこと)
兼題 「葉」「露」。各一首
時局に因めるもの 壹首
送先 來る十月八日締切
平市四丁目マルトモ内 野麥編輯部

雜想片々

白木英尾

清しとみゆるものは、水を物にいろゝ透影だと枕草紙にもあるが、これはいかにも新鮮で明るい感覚である。上代では漆塗りの器へうつす水の透影だったが、私たちがカットグラスの中へ水をうつして、軽やかにくるめきあがる水玉の白く光りを反射する美しさには、ほう！と思ふことがあるだらう。

夕方、サロンあたりの静かな卓上で、赤や、青や、黄いろい色などついた飲みものゝ細やかな水玉をみてゐると、うつとりとすることがある。幻想的な美しさをかんずるのである。

木形子、こけし——あのすんぐりした丸棒に、ちよこなんと乗ったつた圓い顔の素朴な人形が、東北地方特有の郷土玩具なんださうで、私の知人でもこれを蒐めてゐる人がある。先だつて、日本民俗學の柳田國男氏が來られて十三日會でお話なすつた時には、別に木形子につい

ては何も言はれなかつたが、これなどは民俗學の部類に入つてゐないのかも知れない。

東北地方特有のものは、木形子ばかりでなく、いろいろの視角からみたら、もつと澤山採集されるだらうと思ふ。私は、それらの記録が欲しいと思つてゐる。

民俗學といつても、そもその濫觴は平安朝のむかし歌枕をあつめたことから創まるのであつて、俳諧の季題ともなつたり、或は西鶴の諸國咄、馬琴、京傳等の考證的な「よみもの」になつたりして、江戸時代には隨筆風のものとして大いに流行つたものである。

それから、明治中葉の「風俗畫報」のやうなものが、今日の民俗學の文獻として珍重されようとは、誰しも夢想してゐなかつたにちがひない。その多くは隨筆風のものであるといふに至つては、その頃の文學者たちの思ひ及ばないことだつたらうと思ふ。

子文——といふ字がある。ぼうふら虫と言つてしまつてはおもしろくない。子文の字態の一直一曲が、たゞ一つ、腰をもつて力となすやうなうごきを感じさせて、この字ほど、ぼうふら虫のたわいなさと合致してゐるものはないだらうと、ひとりでおかしう思つてゐる。

かねが泣きてくどきをり大根の花白き夕ぐれ——、いかにも田舎の若い男女の簡素な戀が思ひやられて、かるいユーモアさへ感じられる。

八幡太郎義家の山櫻の歌は子供でも知つてゐる。

ところで、八幡太郎義家の歌なるものは、この山櫻の歌を除いては一つも見あたらない。實は、もう半分あることはあるが、安倍なにかしとの合作のあの「衣のたてはほころびにけり」を勘定にいれても、たつた一つ半の作品が後世に残されてゐるにすぎないわけである。

そのたつた一つ半の作品が、不朽の名作となつて子供でもよく知つてゐるのだから、われわれ群小歌人の輩など、とても、八幡太郎義家には敵はない話だ。

平市の文化一般について語るのは尙早の感があるが、是非心がけて欲しいと思ふのは「市史」の編纂である。會津若松市史が完成されてをり乍ら出版費が一萬圓もかゝるため市役所の裏埃の中に捨てられてゐるのは何といつても惜しいと思ふ。それに費した人達の努力は、おそらく若松市を中心とする全知識人の結晶であつたらう。私は、全郷土人の協力によつて「平市史」の成る日を只今から待望してゐる。

○

田村俊子の、ぼたん——といふお嬢妓が、女になる恐怖と苦悶を描いた作品があつたが、確か中學二三年ごろ私は讀んだとおぼえてゐる。その頃から、田村俊子といふ名前は私の脳裡にあつて忘れなかつたが、その後は省としてこの人の作品を見られなかつた。

ところが、新聞によつて、佐藤俊子としてアメリカから歸つて婦人公論などに書いてゐることが解つたが、然し、どういふものか、再びこの人の書いたものを早速讀んでみようと思はない。これはおそらく「ぼたん」の田村俊子に對する愛着は、アメリカ歸りの佐藤俊子によつて減殺されてしまつたからだと思はれる。

日本人の心理なんて、實に微妙なものだ。

○

To Sojuro,

Weeping.

Mistress Okane importunes.....

The evening when the Radish Flower are white.

これは、先年ボストン市から Shio Sakunishi といふ一婦人によつて英譯上梓された「一握の砂」の中にある歌であるが、私は時々思ひ出して愛誦してゐる。

啄木のうちでも私の好きな歌の一つだが、宗十郎にお

輯前歌壇合評

白木英尾
野本多霞夫

白木 板垣喜久さんの長歌は、私などまで思はず微笑させられる思ひ出てすね。高久さんが、果してそのかみの「下げ髪なかく淡紅色の兵児帯しめし乙女」喜久ちゃんを思ひ出されたでせうか。いゝ作品を下すつた板垣さんに、こんど高久さんやみんなて寫眞を撮つて送つてあげたいですぬ。

野本 それがいゝですね。

白木 では、合評を初めませう。これから仲びてゆくやうな人で、田部さんのページからやりませう。

露草のうすむらさきを野あざみの深きにかへんおもひあるなり 田部君子
この人の歌に接するのは久しぶりでなつかしいですね。作歌から遠ざかつてゐた田部さんが、また歌へ復つてきたことは嬉しいですね。そして、やつぱり昔の田部さんらしい歌を相

變らず作つてゐるのを見て、クセといふものは抜けないものだと思ひました。もつと裸心になつて、再出發して欲しいと思ひました。われのみの知るかなしみはいはてこそ静座して今日も千字文書く
この歌など、例のやうにいけばつてゐるので折角「いはてこそ」ゐるかなしみが感じられないと思ひます。

野本 全く田部さんの歌は暫くぶりてなつかしく思ひました。一年ぶり、いや、それ以上かも知れません。「葛の葉」九首をみると、以前のやうな鋭さはないが、本心からの歌といふ感じがあります。
星赤く暗き夜空の下にゐて戀かと如く東京をこふ
「われのみの」は又、田部氏健在を思はせる歌で、仲々良い歌であると思ひます。

困りますね。誰か書いてゐるが、佐藤さんの歌はどちらかと言へば固すぎる。もつとこのほびがあつて欲しいと思ひます。

白木 つまりコチ／＼の歌と言ひますか、木に竹接いだやうなのは、一寸困りますね。市制施行の歌として唯一のものであつたわけ、これは、もつと何とかならなかつたらうか。然し、この人の歌壇における足跡は、私などより古いのであるから、いゝ歌も當然多からうし、作歌信念もしつかりしたものを持つてゐるだらうと思ひます。

野本 作歌信念はしつかりしたものです。私などは及びませんね。眞面目な生一本といふ佐藤さんの性質です。歌の固さもそこから來てゐるかも知れませんね。

咲き落ちて花もあきたよばんやりと死ぬることなど思へるにけり
切實な作者の感情に共鳴できるいゝ歌であると思ひます。然し今度の歌は第一輯からみると落ちてゐる感がありますね。

白木 そう。落ちてはゐますね。それにこの人は言葉をゴマ化すといふか、たとへば、あきたよ、影かよ、たぐるか……など、間投詞で調子をつけてゐるが、これは一考して欲しい

いと思ひます。

黄あやめの蕾ふゝめるこの池水底に大き枇杷の葉沈めり 草野みどり

草野さんの歌は、いつも平凡單調な感じがするが、歌は謂はば生活の環境によつて生れるのであるから、それも仕方ないことと思ふ。なんしろ、無理せずには作るのが一番いい。それが、作品並に作者に對して好意を持てるゆゑんでなからうかと思ひます。

野本 そうですね。草野さんの歌はどれも一應はとれないことはないが、平凡單調な感じはまぬかれせんね。「黄あやめの」歌は、池の水の上下に黄あやめと枇杷の葉をもつてきて、なんでもない事をやゝこしくしてゐる。柚若葉いや深みゆく濃緑の葉蔭にこゝみ 雜草ひきけり

これなども、雜草をひくといふことに對して若葉が深くなつて、濃緑になつて、その葉蔭とくどくどしい説明をつけすぎであると思ひますね。

白木 同感です。一體に同じところをぐるぐる廻り作ら三十一字にするといふ觀がありますね。もつと視界をひろくして觀照の深さを求めて欲しいです。この「池」のうちで、私

白木 この「われのみの」がやつぱり良い歌なんですかね。それならいづそ「黒出目金」の歌が出色してゐるでなからうか。

黒出目金らんちろをとるていささかのひけ目もあらぬ顔をしてゐる

「ひけ目もあらぬ」顔が、微笑ましく思ひやられる歌でないですか。すこし無理な言葉だが「らんちろ」といふ表現も面白いと思ふね

野本 「黒出目金」の歌は、以前の 部氏の臭味がありますよ。この臭味が悪いといふわけではないが、田部氏としては「星赤く」われのみの」の様に進んでゆくべきでせう。田部氏は山の中の静かさの人でなく、賑やかな都會の人です。そこに矛盾があるわけですね。永らく休詠してゐて、復歸したばかりであるから、これからどん／＼作つたのの後に田部氏の姿は批判されるべきであると思ひます。

喜びの自づなしとて日を限り住む我が町に市制發布さる 佐藤清長
相共に暗蕭蕭しき掌をのべて自活經濟を示せ平市

二百共市制を歌つたものですが、自分だけがわかつてゐると云ふもので、どちらも上句が

は

みなぎらふ薄にぐり水陽に透きて石それぞれに水の垢見ゆ

の一首、歌壇もいゝところを捉へており、手法もしつかりしてゐて、殊に、三句の「陽に透きて」が一首を翻動させてゐると思ひますいゝ作品です。

野本 悪いところばかり言つたが、この歌は素直ですね、この素直さを伸ばしてゆく事が大切であると思ひます。次は城芝鳴さんへゆきませう。

友の家に垣根となせる薔ばらを手折らん とせば花のこぼるゝ 城 芝鳴

白木 熱心な作家意欲を持つてゐる人として私は注意しますが、作品には一層の斧鑿が要りますね、この歌などは、一首が單なる説明に終つてゐるので、「花のこぼるゝ」感興は更でない。

野本 これは平凡です。この人は、もつと一首々々に對して愛惜の念をもつて貰ひたいと思ひます。

屋根裏に何やらん蛾のはだきて寝られぬ夜は心落ち居す
「何やらん蛾」は氣どつてゐて役に立たない

又寝られないから心が落ちつかないのでなく心が落ちつかないから寝られないのでなくうか。

白木 それはまあ作者の状態に任せるとしても、「何やらん蚊」といふことはない。大きいとか小さいと言へうなものである。それに「心落ち居ず」なども取りましてゐるよりも、寝られぬ夜の蚊のはたき音についてもつと言へうなものである。高久さんの「あかときの営みに鳴く雀等の寢足らはぬわが窓にかしまし」の歌が、無難作のうちにも表現の確かさを失はないのと比べるとよく解ると思ひます。

この春も蛇を食ひて己が病癒さんとせり命懸けしきに

私は、この素直さがいいと思ひます。然し、これも過去形でなかつたら、作者の姿が、もつとはつきり胸をうつのでなかつたらうか。野本 そうかも知れないね。どうも物に對する感動が浅く、食ひ足りない感があります。もう少し焦點を鮮鋭にすることが必要だらうと思ひます。

歸り來て子の寝敷帳に添寝する心ゆとりや梅雨明けにけり 田中賢介

實感に即して切實な生活を歌ふこともこゝに到ると敬服します。この歌など無條件で頂戴できる良い歌であると思ひます。

白木 「心ゆとりや」はどうです？ あまりに大成された人の言葉でないでせうか。

野本 いや、これは田中君だからいゝんですよ。これが非常にきいてゐるのです。田中君の生活感情がしつくりときて……私では一寸使ひこなせないでせうが――。

白木 そんなもんですかね。若い癖に妙に老成ぶつた歌を作つたり、いやに氣取つた風をしつたりするの、私は些しいと思ひませんが、若い者同志の歌には、やつぱり若さとか朝氣とかいふ欲しいと思つてます。

わが生活いよくらし放膽の雑誌まくらに今日も寝て居り一見荒削りの歌であるが、若者のふてぶてしさ、たくましさは窺はれて、私はこの作品に一點を投じたい。もちろん表現にも難がなくていい。

粗壁の煤にまみれてひそみ居し蛾舞ひて居り梅雨くらし雨になると、表現について問題になる歌である。「白馬、馬にあらず」といふことがある。

が、「梅雨くらし雨」といふ用語は、オヤ！と思ふ人が多からう。それはさておいても、この歌は文字通り煤けてゐるやうでバツとし

ない。

野本 この歌はバツとしないからいい歌であると思ひますね。これがバツとしたならば、梅雨の感じがうすらいで了ふ。「梅雨くらし雨」で一層深刻なものになるでせう。「梅雨暗き空」と云ひたいでせうが、梅雨くらしは梅雨空のくらさを云つてゐるもので、雨と云つて、そこにじめ／＼と雨が降つてゐることになると思ふ。強意になるのですね。田中君は特異な詩的感覚の所有者で、些少の偽りのない感情の吐露に力強いものを感じるのです。

白木 とにかく野本歌壇は、この人あたりが頭張つてくれるやうになりたい。中堅となる人が少いのは心細いからね。それから、こんどは美崎さんの近來の快作「鰯」一聯をみませう。

鰯また鰯日につぐ鰯の中にあて色づく妻を子等にきゝけり 美崎一郎

三十一字の緊密さもこゝに至れば、もう文句ない出来です。鰯の連音による快調、殊に下句がこの歌のいのちです。一聯九首のどの歌

喫煙室

をみてむらがない。「文は人格なり」といふが、短歌においてもこのことは言ひ得ると思ひますね。強いて難をみつければ、悲しきは人の性かも迫はれつゝ童ら鰯を持ち逃ぐるなり

この一、二句はどうです？ 野本 概念的ですね、どうも、作者の興味に同感できない歌です。「鰯また鰯」は私も賛成しますが、また

子等にきく妻の色づき何となく心ひかれて野に出てにけり

この方が、私はいいと思ひます。青旗はマストマストにはためけりなりはひなればわれも出て立つ

「なりはひなれば」は、どんなものでせう？ 白木 これは、別に悪くないではありませんか。この言葉の蔭にかくれてゐる作者の心意が感じられて、寧ろ、いみじくも言ひ得たりといふ氣がします。美崎さんの歌は、才走つたところとて別にながら重厚味といふ點において、恐らく野本歌壇の一人者だと思ひます

爪の間に刺さりし鰯の小さき骨にぶく痛むを耐へていねけり

◆思ひがげなくも、板垣喜久子さんの御筆蹟と御作品に接しまして、うれしく／＼存じました。長歌に於いては何も存じませんのです。喜久子さんの幼なき日の思出が、いとけなき日も、ふるさとも、遠きかなに、淡けれど

この一篇にありありと浮んでまゐります。どうぞ、「野本」にある若い女性達をお見捨てなく、これからのなつかしい御作品を下さいます様おねがひいたします。(眞子)

◆サボテンと百合の大輪咲く今朝は貧しき庭も明るくありぬ(高久曉露)

先生の歌としては珍らしく明るい歌です。先生の歌の持味は、平明で飾らないうちにあるのですが、このお歌などは實にいゝと思ひました。「貧しき庭」は御謙遜でせうが、「明るくなりぬ」とせずに「ありぬ」としたところ、無技巧の技巧があつてます。先生の歌風が芽えてきてをります。

「女人六唱」(蔓珠沙華)どなたの匿名か知らないが、「八つ手」「潮騒」「雨空」遍路」

の類を載せるより、遙かに面白い。歌が生き／＼としてゐる一首々々に心がひかれるのです。感心いたしました。(新三)

◆詩壇がさつぱり駄目のやうですが、片寄歌二氏は「郷土文化について」を書いてたゞてあとはどうなんでしょうか？ 詩壇には人が無いんでせうか？ 編輯者の方にお尋ねしますが、もつと詩壇に力をいれて下さい。(三四郎)

◆先日某紙に載つた野本の批評、あれは決して批評でもない。俺なんか讀んでゐて胸がむか／＼してきて、ブンなくつてやりたくなつた。平市には、未だに斯くの如き養つた野郎が横行してゐるのかと思ふと、眞に嘆かしくなる。それに亦、あんな原稿を平氣で載せる新聞があるのかと思ふと、郷土文化の向上は百年河清を待つ如しである。

(一)野本ファン) ◆俳句の餘白欄は惜しいですね。石橋氏はあすこを有効に使つて編輯する必要があると思ふが、如何？ (俳生)

この欄の原稿を募集いたします。必ず原稿用紙へ書いて締切までに編輯部宛送つて下さい。匿名でも差支へございませ

野麥だより

○どうも、寄るときはと戦争の話ばかりで「剣戟鳴りてミューズは黙せり」といふ感が致します。非常時だ準戦時だ、満洲事変だ上海事変だ、と謂つてゐるうちに未だよかつたのですがこんどの北支事變が日支事變と擴がつて、親戚や友人知人のうちからも戦線へ征く者があつたり、殊に名譽の戦死をする者があつたりすると、今や國土草木を覆ふ戦雲のひろがりに入心悉く緊張と昂奮の日夜を過してゐるので、勢ひ、私たちのこんな仕事は、どうでもいゝものとして閉却されてしまふのです。

○然し、道がに、雑誌なんか廢めてしまへ！と言つてくる人もないやうですが、よくも／＼飛んでもない御時世にこんな尻づまらない事をやり出したものだ、我々から呆れる時があります。けれ共また

文化上の社會事象が一切停止してしまつた後の寂寥さを考へると、我々にはまた、私たちの護るところがあるやうに思ふのです。戦地へ立つのも男子の使命であれば、同時に、私たち読後人にも、それ／＼の使命が課せられてゐると、私は思つております。

○今輯は、出征氣分の騒然たる中編輯を進めたのですが、豫め編輯プランを立てゝも、それがさつぱり役に立たない——といふことが痛感させられました。第一、二輯に比すると、ごらんの通りの寥々乎です。編輯子が三拜九拜して頼み奉るのを一向チランボランにされてしまふのは、全く閉口いたします。こんな時局にあつても、作品行爲を休止せずにゆくのが眞に私たちの取るべき道でなからうかと思ひますが、くれぐれも同人社友諸氏の奮起をうながしてやみません、編輯子の苦衷も察していただきたいと思ひます。

○私たちの作品について、眞面目な批評を聞きたいと思ひます。試みに「喫煙室」といふのを拵へておきましたが、あのやうな短なものでも、五六枚になつたものでも、或はもつと長いものでも構ひませんから同人社友は勿論のこと一般の方達も御執筆下さつて御寄稿をお願いします。誰も彼もが、寄つてたかつて「野麥」を作りあげるやうな氣持になつて欲しいと思ひます。それには只今のところ、随筆、感想、小品、紀行、日記文といふやうなものを澤山頂きたいと思つてをります。

○預告にもある通り來月十日には野麥社として最初の短歌會を開く筈ですが、これは實は野麥社大會在市公會堂竣工後に華々しくやらうといふわけで、大會の代りにほんとの内輪ばかりで短歌會を開くことになつたわけです。然し、久しくこの種の集りがなかつたので

物淋しさを感じてをります折柄、當日の盛會が今から思ひやられます。短歌人であらうとなからうと奮つて御出席下さつて「野麥」について腹藏ないところを語り合つて頂きたいと思ひます。

○社費についてお問合せの方がありますが、何分、創刊早々で果して頂いていゝものやら一應の疑念もないわけでないのですが、御芳志によつてお送り下さる分は有難く入帳致してをります。來輯あたりで一旦收支の精算をしてみようと思つております。(一)

次輯原稿締切 十月末日

野麥第三輯	
昭和三年九月十日印刷納本	昭和三年九月十日印刷納本
編輯人 野本孝雄	編輯人 野本孝雄
發行所 東京市豊島區池袋二丁目九番地	發行所 東京市豊島區池袋二丁目九番地
印刷所 柴田書局	印刷所 柴田書局
電話 二三四番	電話 二三四番

昭和
十二年
九月
三十五
日
發行
本

